

次の会合までに、まとめなければならぬ資料がある。

松能組の組長第二秘書である一松は、このところずっと事務所にこもって仕事にかかりきりだった。

管理店舗の売上チェックに、組員の人事資料整理。新規取引の計画から、法的手続きの始末。秘書といえれば聞こえはいいが、地味な雑務処理も多い。組長である父や、若頭である兄をはじめとする幹部たちに報告するのが主な仕事とはいえ、一日中パソコン画面を見ていると眼精疲労でますます目つきは悪くなるばかりだ。

(さすがに、ちいと疲れてきたのお)

かけていた眼鏡をはずして目頭をおさえ、またかけ直す。肩をならしたり首を回したりを数度行つてから、一松は再び画面に向き直つた。

朝からろくに食事も摂らず、マウスとキーボードばかりを操作し続けて数時間。窓の外はいつの間にか夕暮れとなつていたが、仕事の方はまだ終わりが見えない。

ヤクザという職業とは思えない仕事ぶりだが、一松は元々真面目な性格ゆえに、一旦引き受けたものにはのめりこんでしまう性質だ。我慢の限界がくれば爆発しかねない危うさもあるが、今のところ適度にガス抜きする機会が与えられているので、特に不満はなかった。

とはいえ、さすがにそろそろ休憩を挟みたい頃合いだ。

(気分転換に外の空気でも)

吸ってくるか、と大きく伸びをすると、ガチャリ、という音とともに突然事務所の扉が開いた。

認識するようになった。

休日二人で出かけるだけならともかく、いちごのパフェを相手に食べさせるような、極道らしからぬ振る舞いさえする。時折、下の者に示しがつかんと注意を受けているようだが、舎弟達にとっては今更だ。組長秘書は若中を特別可愛がつているし、目をかけて甘やかしている。それが松能組全体の共通認識だった。

ちなみに、組長第一秘書であるチョロ松はこの二人の奇行による主たる被害者であり、もう一人の若中であるトド松は、舎弟以上に見慣れた光景だとすでに諦めている。若頭であるおそ松と、補佐のカラ松にいたっては、可愛い弟たちのじゃれ合いだと微笑ましく見ていることが多かった。

「あ、ノックすんの忘れたわ!」

あはは、と頭を掻いた十四松は、舎弟が出て行ったのを確認してから、一松に説明する。実は、と内緒話をするように声をひそめて。

「おそ松兄さんに言われて来たんよ」

「おそ松兄さん?」

どういうことだ、と一松は繰り返したが、十四松はあつさりとおそ松兄さんの見張りに行けつて!」と続けた。

「見張り? じゃつたらドアの前におるじゃろ」

「護衛じゃのうで、仕事の見張りだつて」

よくわかんないけど、と言いなながらも十四松はおそ松の言葉をそのまま伝える。

「このヤマが終わつたら、一松兄さんが前から欲しがつとつ

「一松兄さん!」

そう呼ぶのは、世界に二人しかいない一松の実の弟たちだけ。そして、ノックもせずにはドアを開けたにも関わらず、一松がその姿を確認した瞬間に目尻を下げてしまう相手は、世界にたった一人だ。

「なんじゃあ、十四松。どうしたんね」

「兄貴、すいやせん。十四松の兄貴が急に」

事務所の前で見張り番をしていた舎弟が十四松の後ろから口を挟んだが、一松はいいから持ち場に戻れと合図する。

「コイツはいつものことじゃけえの」

しょうがないやつじゃ、とは言うものの、それで? と十四松に向き直つた一松の顔は、さつきまでとは比べものにならない程やわらかい表情だった。クセになっている眉間の皺は、どこにも見当たらない。呆れるような物言いの中にも、どこか優しさを含んでいる。

それどころか、十四松はまるでそこが指定席でもあるかのように、ぼすん、と一松の膝の上に座つた。悪戯っぽい笑みを浮かべながら差し入れ、とコンビニ袋に入ったおにぎりとおペットボトルのお茶を見せると、一松の方も特に驚いた様子もなく十四松を膝に乗せたまま、それを受け取る。

極道の家に生まれた、悪童の六つ子。

幼い頃にそう呼ばれていたという噂の松能組幹部の兄弟で、一際仲の良い二人だ。初めてその様子を見た舎弟たちは驚いたものだが、慣れというのは恐ろしいもので、当たり前のように繰り広げられる光景に、この二人はこれが普通なのだ

たモンを褒美にやるつて言つちよつたで」

「え」

「じゃけえばくに、一松兄さんの仕事が片づくまで見張つてこいつで。ほんで、たまには馬にニンジンやらにゃあ言うて、カラ松兄さんと出かけたで」

こんな時間から競馬かのう? と、首をかしげる十四松の言葉に、一松の身体は信じられない気持ちで震えていた。

「それ、十四松。ほんまに、ほんまにそう言つちよつたんか? おれが前から欲しがつとつたモンをくれるつて、おそ松兄さん……いや、若頭が?」

「うん。一松兄さん、おそ松兄さんに何をねだつたん? いいな、ぼくも褒美欲しい!」

だから頑張つて見張る! と、息巻く十四松に、一松はすぐさま十四松を膝から下ろし、パソコンに向き直つて作業を再開させた。もちろん、貰えるという褒美のためだ。長いこと要望を出し続けて、色んな事を我慢して、それでも願ひ続けてきたもの。

それがすぐ手の届くところまで来ていると知つては、とても冷静でいられない。一松としては、少なくともあと数年は先のことと思つていたので。

(マジか、マジか……!)

高校を卒業して、兄弟揃つてすぐにこの世界に入った。そのとき一松が誓つたのは、この弟を一生守っていくことだ。たとえどれだけ自分の手を汚しても。

(何をねだつたか? つて、そんなモン)

決まっている。ひとつしかないのだ。今までずっと、一番近くで大切に育ててきたもの。

松能組の五男、若中の松能十四松だ。

\*

「ウチは極道じゃけえ、カタギの家とは違うんじや」

幼い頃から組長である父や母から、そうやって繰り返して言われてきたのは、一松も十四松も同じだった。

もちろん、それは他の兄弟たちも同様であつたけれども、序列というものを特に重んじるこの世界で、長男のおそ松は六つ子であろうとも跡取りであると真っ先に自覚しただろう。いや、せざるをえなかった、が正しいかもしれない。

カラ松もチヨロ松も、高校を卒業してヤクザになればいざれおそ松に続く役職になるだろうと想像していただろうし、一松以下の弟たちはさらにその下へ続くことを知っていた。

全員が若頭以下の役職に至るまでには、もちろん相応の功績を上げる必要はあつたけれども、個々の能力を活かし、今その地位についたと言える。

「六人の倅がいて、松能組は安泰じゃの」

会合の席で、父が組員達とそんな会話をしていたことを漏れ聞いた。杯を交わさずとも血縁で繋がる、絶対的な存在が同時に六人。生まれた時からこの特殊な世界を当然のものとする英才教育を受けている。

父の趣味で極道を題材にしたドラマや映画は一通り自宅に

揃っていたし、出入りする幹部や若い衆から坊と呼ばれ、その身体に描かれる模様や傷を垣間見ることもあった。カタギの家に生まれたならおおよそ見ることもないものが、近くに溢れていたのだ。

一般家庭の子供がごく普通にアニメや特撮を見てヒーローに憧れるように、十四松はかつて、きらきらとした笑顔で一松に語った。

「父さんもじゃけど、極道ってかっこええのう、一松兄さん」  
「否定はせんが。おまえ、ほんまにわかっとなるんか？ なんでもそう思ったんじや？」

「なんで？ って、惚れた相手を命がけて守って、筋を貫き通すって、かっこええじゃろ！」

きよとん、とした顔でそう返す十四松に、一松は一瞬驚いたものの、「ああ、そうじゃの」と返事をしつつ、心の中だけため息をついた。

やれやれ、今度は一体どの作品を見たのだろう。父さんが気に入っている役者が主役の任侠モノだろうか。これらは薄汚いリアルな描写をするものもあるが、都合良く綺麗な部分ばかりを抜き出した、現実とは程遠いと呆れるような作品もある。

この弟は、無垢で純粹だから。

そうしたものを全て信じてしまっても不思議ではない。  
「男が男に惚れるっていうのは、すごいことじゃねえ」

うっとりと言語る姿を前に、何も言えなかった。

ただ真っ直ぐに憧れていたのを知っている。だからこそ、

学生時代に「兄さん、大好き」と伝えられる好意に、ぼかけた期待はしなかった。そんな都合のいいことが、起こるはず

などないと思っていたのだ。

\*

「ぼく、一松兄さんに惚れとる」

高校の卒業式を目前に控えたある日、いつになく真剣な顔をした弟から告白を受け、一松はその意味を正しく理解するのにしばらく時間を要した。

ああ、またか。ごっこ遊びのような、昔から繰り返されたいつものアレだ、と思う一方、十四松の様子が違うことに気づいてもいた。

一松は十四松と幼い頃から一番一緒にいたし、ずっと気にかけてきた。そもそも、六人もいる兄弟の四番目と、五番目。個人として認識されることが少なく、言ってしまうえば影が薄かった。その中で寄り添うようにして助け合い、生きてきた。

末っ子のトド松よりも泣き虫で、気弱で優しい十四松を一松は昔から特別可愛がつて甘やかして、面倒を見てきた。だから十四松が真っ先に名前を呼ぶのは、いつも一松の名前だ。

そして、一松が気落ちしている時に真っ先に気づいてくれるのも、泣きたい気分の時にただ隣にいてくれるのも、それは全て十四松だった。

単純に言えば、懐かれています。少なくとも、嫌われてはいない。いいや、おそらく好かれている。

その程度の自負はあつた。

自分の愛情が性欲を伴うものだと気づいたのは中学に入ってからだったが、しかしきつと、十四松は違う。

一松兄さん、大好き。

はつきりとそう言われたこともある。曇りのない笑顔で、甘えるように抱きつかれ、悪い気はしなかったけれども、その感情は家族愛であると信じて疑わなかった。それが、惚れているという言葉に変わった意味を、考えずにはいられない。いや、惚れていると言ったって、きつと性欲を伴うものではない。任侠の世界によくある、師弟関係のようなものだろう。大丈夫、おれは誤解したりしない。

しかし目の前の十四松が頬を染め、その考えを否定している。一松に何かを求めているような、一松を欲しているような、熱を持った瞳。

まさか。もしかして。やっばり。

混乱した脳内に、そんな言葉ばかりが浮かんで消えた。そうしているうちに、十四松の告白は続いた。

「高校卒業したら、身体に墨入れるのはもう決まってるけど」でも、と一度は躊躇うそぶりを見せたものの、十四松は聞き違えようもなく、言葉にした。

「一松兄さん。その前に、ぼくを抱いて」

冗談とは思えない声。そこにまず狼狽えた。そして突然の要望に、その内容。

「な、なに、言つとるんじや。抱くって、」  
セックス。

それしかないだろうという空気に一松は圧倒される。  
「ぼくの覚悟じや。これからずうっと、一松兄さんと一緒の道を行くけえ。……おねがい」

一松兄さんのモノになりたい。  
兄さんの手で、ぼくを兄さんのモノにして欲しい。

くらくらすような、甘くてあまい誘い。

十四松の心は、もう決まっている。それは容易い道ではないと知っているはずなのに、一松が何年も悩み続けてまだ答えの出せない問題だというのに、十四松は軽々とそれを飛び越える。

一松の気持ちさえ、十四松はきつと知っている。だから、惚れた弱み以上にコイツにはかなわないと思うのだ。

しかし、十四松の覚悟は一松にも伝染する。

惚れた相手にそこまで言われて腹を決められないような男に、ヤクザが出来るものか。ここで断るよりは、報いてやらなければ。これから一生かけて、おれはおまえを守っていくから。

「……ああ。わかった、ええよ」

そして二人が最初に起こした行動は、まるで絶対に戻らないと誓うような、ケジメをつけるような初体験だった。

\*

古い家だが、部屋の数と広さだけはあまりある自宅に感謝したのは、かくれんぼの時代以来かもしれない。普段使っていない離れの一室で、月明かりの下、二人は事に及んだ。

パジャマ代わりの浴衣は、少し帯を引くだけでするすほどどけ落ちる。鎖骨のあたりから手を差し入れ、なめらかな肌に触れれば、まだなんの柄も入っていない十四松の肩と胸があらわになった。

「きれいな肌じやの」

「これから墨入れてもつとかつこようなるけど、やっぱり最初に触られるのは、一松兄さんが良かったんじや」

えへへ、と笑うその全てが愛おしい。一途で、純粹に好意を寄せてくれる姿は、あまりにも健気で可愛すぎる。

「はあ、たまらん」

これが本当に同じ血を分けた弟だというのか。確かに同じ顔のはずなのに、仕草や表情のひとつひとつが、間違いない一松の恋い焦がれた十四松のものだった。

我慢なんて出来るわけがない。据え膳食わねば、とは言うけれど、一松にとつてこれ以上の御馳走はどこにもない。さほど多くないとはいえ、系列の店で受けたサーブिसなど、比較対象にもならなかった。

唇を合わせ、一松は十四松の息を奪うようにして食る。

「ん、んう、……ふ、」

今思えば、性欲だけは一人前だったが、まだ十代の身体は

完全に出来上がってはいなかった。思いつく限りの入念な準備と丁寧な前戯を施したが、成長過程にある幼い身体に無理をさせた。なんせ男女のセックスとは違うのだ。

「十四松、ほんまにええんか」

「うん。ぼく、一松兄さんが欲しい」

そんな言葉を信じて踏み入れた身体は、狭くて小さくて、それでも一松を必死に受け入れてくれていた。

「……痛いかな？」

「んーん、嬉しいんじや」

涙を浮かべながらも首を振る十四松の髪を優しく撫でてやる。辛くないわけがないだろうに。それでも十四松は嬉しい、ぼくを兄さんのモノにしてくれてありがとう、と健気に一松に伝えてくる。

結合を果たしたというだけでも満たされて、十四松がその状態に慣れるまで、しばらくはただ抱き合っていた。キスを繰り返して、目尻に浮かんでいる涙を舐めとって、一松も精一杯気遣いを見せる。

しかし、ギリギリの理性で我慢していたとはいえ、十四松の尻の穴がやがて一松の肉棒をきゅうきゅうと締め付けて刺激し始めると、一松もついゆるゆると腰を前後させてしまう。

「一松兄さん。もつとうごいて、ええんよ？」

「阿呆。どがあなつても知らんぞ」

「アッ！ あ、あ、あつ」

ピクピクと震える身体に、一松は容赦なく熱を穿ち込む。

「にい、さ、……あん、あう、あああ！」

濡れた結合部が、にゅぽつ、ちゅぶ、と卑猥な音を立てる。初めての身体は何もかもぎこちなくて、けれど戸惑いながらも受け止めてくれた。排泄孔は可哀想なほど本来の役割とは違うことを求められ、切なげに応える。

きゅう、きゅん、と肉棒に絡みつき、ゴム越しの射精を求めた。

「ああ、おまえは、おれのモンじや」

ひどくしてすまんの、という言葉とは裏腹に、一松が十四松の身体の中を抉る動きはつい激しさを増した。パンツ、パンツ、と大きく肌を打ち、あますところなく十四松の身体を追いつめていく。

「アッ、ふあ、あつ、ああつ！」

(まだ女も知らんのに)

知る必要はないと阻害したのは一松に他ならないが、こうして男を教えたしまった以上、この先一松が十四松にそれを許すことはないだろう。

だから暗示のように繰り返す。十四松は、一松のものだと。この体を、他の誰にも許してはならないと。

「ええ、よおつ……。あつ、ぼく、は、……一松にーさんの、じゃけえ……つ」

だつてぼくが頼んだんじや。そうして欲しいって。

それは事実ではあったけれども、一松の執着や想いの深さを知らない十四松がそう認識しているなら、それでいい。

逆は決してありえない。一松が四男で、十四松が五男である限り。序列がもつとも大事で、逆らうことは許されない。

一松とて、父や兄の言うことは絶対だから、従順に振る舞っている。十四松のことも許しを請い、対価を払って、手順を踏むように願ひ出るしかないのだ。

「ん。いい子じゃ」

忘れなさんな、とまるで小さな子供に言い聞かせるように言つて、一松は十四松に口づけた。そして「しつかり掴まるときんさい」と両腕を背に回させ、そのまま一松は十四松の全てを貪るように抱き続けた。

\*

あの日から、何年経つただろう。

正式に組へと入り、二人の身体には懇意にしている職人の手によって見事な絵柄が刻まれた。

それからの毎日は、ろくでもないことばかりだったように思う。酒を浴び、金を巻き上げ、抗争のたびに暴力をふるつてはあたかも真実のように嘘をついた。弱者を助けるふりをしながら、より深い闇へたき落とすこともした。

成果をあげて認めてもらい、より高い地位を得るためだ。

他の兄弟も似たようなものだったが、一松にはどうしても欲しいものがあつたから。目的のために、手段は選ばなかつた。

そんな中、十四松だけは変わらなかつた。

昔憧れていた綺麗なばかりの物語のように、カタギの子供

十四松はわかつていないようだったが、おそ松が「馬にニンジンやる」と言つたのは、一松に対しての言葉だろう。

忙しくて、最近あまり十四松とは過ごせていなかった。セックスだってご無沙汰だ。飢えた獣だと知りながらわざわざ寄越したのだから、今日は手を出してもいいということだ。

ドアの前にいる舎弟に今日はもういいから帰れと指示を出し、念のために内鍵をかけておく。

一度はゴールが見えたことで仕事へのやる気を出したものの、自らの飢えに気づきながらそれをコントロール出来るはずもなく、一松は我慢することなく餌にしゃぶりついた。

無防備に眠る十四松の上へとのしかかり、ボタンをはずして着崩したシャツの下へと手を滑り込ませる。首筋には跡が残らないように気をつけながらキスを落とす。

所有の証は、まだ残せない。

「ん……？ う、ん、」

夢うつつ。わずかな反応はするものの、覚醒はしない十四松の身体を一松はまさぐつていく。久しぶりに触れる体温に、愛おしさが止まらない。股間をまさぐれば簡単に反応するのも、昔から変わらないと懐かしく思った。

のんびりしている余裕をなくし、まどろっこしいと十四松の下半身を全て外気に晒させる。繋がるための準備には相当時間がかかるだろうと、一松が後孔を確認していると、中途半端に脱がせたシャツ一枚という姿になってようやく、十四松は目を覚ました。

「……え、一松にいき、ん？」

と付き合つて、時に助けることもある。舎弟をかばつて怪我を負うこともあつたし、その度に一松は心配で胸が潰れそうになりながら、十四松を傷つけた相手に何倍もの報復をしたし、無事を確認した時は強く抱きしめた。

おれはおまえが大事なんじゃ、何度言えばわかる、と訴えれば、ぼくもじゃ、と応えてくれた。機会さえあればセックスもしたし、十四松の身体は初めての頃と変わらず女を知らないまま、一松だけを受け入れてくれる。

(今でも十分、満足できる状況はずなんじゃが)

贅沢な悩みかもしれない。しかしそれでも、安心は出来ない。十四松は自らの意思で一松のものになつてくれたけれど、その身体は松能組のものだ。いざという時、その手綱を握るのは一松ではなく、組長である父か若頭の兄である。

一松が十四松を一時的に任せられても、所有は認められない。

(それが今回のヤマが終わつたら、正式に貰い受けられる) そう思つて振り返れば、一松が昔を思い出しながら上の空で仕事をしている間に、十四松は黒い革張りのソファでうたた寝をしていたようだった。

(やれやれ、なにが見張りじゃ)

そんな退屈な仕事、十四松には不向きだということくらい、若頭もわかつているだろうに。普段は見事なくらい適材適所な采配を振るうヤツのことだから、裏があるに違いないことはわかつていた。

大方、これも忙しい一松へ届けられたご褒美の一部なのだ。

「ん。寝とってもええが、起きたならサービスしてもらおうかの」

「えつ、え、何、しとるん、？」

下半身を包む衣服が全て取り払われていることに驚いてみると、一松は自身のベルトのバックルをはずし、下ろしたチャックの奥から取り出したモノを十四松に啜えさせる。突然の行為に驚いた様子だったが、瞬時に察した十四松は大人しく従い、口を開けた。

「ん、ンンン……ぐ、うッ！」

「静かにな。表には、ちゃんと仕事しとる見張りがおるけん」居眠りした見張りにはおしおきじゃ、と喉奥を突き、一松は十四松を追いつめていく。やわらかなベッドの上で大切に、優しく抱いてやるセックスもいいが、事務所ソファで本能のままに繋がるのもたまにはいいだろう。見張りの舎弟はすでに帰してあるのだが、少し意地悪してやりたい気分だった。

尻の中に出すと後始末が大変だが、口内ならば飲ませて簡単に腹の中まで落とすことが出来る。後頭部を押さえて逃げ道を開き、一松は何度も十四松のやわらかい口内で前後に動いて、自身を高めていった。

「はッ、んんん、ううっ」

やがて息苦しさに涙を浮かべる十四松の顔を見ながら欲望を吐き出し、ズルリと引き抜くと、咳込んでいる十四松の片足を大きく上げさせ、狭間に全く衰えていないそれを押し当てた。

「えつ、ま、待って、待って！」



いくらなんでもそんな急に、という意図はわかったが、一松は聞く耳を持たない。なぜなら、

「なんでじゃ。待つ必要なんてないじゃろ。おれにはちいともわからんが、何故だかおまえの尻の中はずいぶん柔らかく解れとるし、濡れとる気もするけえのお？」

逆になんでこんな準備されとるのか聞いてやりたいくらいじゃ、といやらしく口角を上げた。ついさつき確認した時にわかって驚いたことだが、十四松は無断でそれを一松に知られた予想外の羞恥で、言葉にならないようだった。

「ほれ、言うてみい」

「アッ！」

嘘ではないと証拠をつきつけるように、一松は二本の指で十四松の孔を探る。色づいた窄まりはすんなりとそれを迎え入れ、動かされる度にちゆく、ちゆく、と水音を鳴らした。

殺風景な事務所内に響く、艶めかしい粘着音を何度も聞かされる。ちゅぼ、ちゅぼ、と抜き差しされれば気持ちよくてたまらない。もっと太くて熱いモノが欲しいのだろうと煽られる。

「ん、あ、だって、え」

幼い子供が言い逃れをするように首を振ったが、一松は許さない。

「しばらくしとらんはずじゃのに、おかしいのお？ いくら十四松が助平に育ったゆうても、こんなとこ勝手に濡れるはずないじゃろ」

なんでこがあなことになつとるんじゃ？ と重ねて質問さ

おまえの望み通りに、と続けたが、ふと気づいて忘れとつた、とデスクの引き出しからゴムを取り出した。

そのまま手早く装着すると、十四松の返事と同時に一松は腰を押しつける。

「あつ、あ、んっ」

「こら、声は控えんさい」

この部屋は防音工事もしてあるから、多少ならば外まで十四松の声が届くことはないだろうが、ドア前に舎弟がいるという演出の都合上、一応そう言っておく。声を我慢されるのは面白くないし、かといってあまりに大声になるのも困る、という一松の非常に勝手に面倒な注文だった。

「ん、んうっ、はあ……、ん」

指とは比べものにならない質量にグッ、と内臓を押し上げられ、性感帯を擦られて十四松は注文通りになるべく声を殺し鳴いた。勃起して先走り垂らす陰茎も、肉棒を突き込まれている結合部も、全てが一松の前に晒されるようなあられない格好を、強要されるままに受け入れる。

「一松兄さあん」

代わりに十四松は、とことん甘えた声で一松の名を呼び、キスをねだる。ぼくのことを可愛がって欲しい、という無言の訴えに一松が弱いことを知っているのだ。

「しようのないヤツじゃ。ほら、口もつと開けて舌出せ」

「んえ、は、っんんっ」

ピストンを繰り返しながら、口づけては繋がる。パン、パン、パン、と肌を打つ音に合わせて、ばちゅ、ばちゅ、と

れ、十四松はいよいよ観念したようだった。

「だって、一松兄さんの仕事が終わったなら、一緒に帰って、久しぶりにできると思ってた……」

「ん？ 何を」

ハッキリ言わんかい、と勃起させている急所を握ると、十四松はビクン！ と身体を跳ねさせて、たまらず告白した。

「うう……、ぼく、一松兄さんとセックスしたかったんじゃあ。じゃけえ、兄さんの仕事が終わったらすぐ出来るようにって、自分でいらって準備してきたんよ」

ごめんなさい。

素直に謝る十四松に、一松が怒るはずもない。居眠りしたところで、見張りなんてものは本来十四松の役割ではないし、そんなものは誰も期待していない。

十四松の後孔を慣らしてやるのは一松の楽しみの一つではあるが、それを奪われはしたものの、十四松が一松を求めて自ら尻を弄るようになったのは、喜ばしいこともある。

「はあ、なるほど。十四松はおれとセックスしようて？ おれのことを考えて、自分でケツいらってきたんか？」

わざと言っている。それはいくら十四松でもわかったが、否定する要素はどこにもなかった。さつき自分が告白したことをそのまま繰り返し返されただけなのだから。

「うん……」

だから頷いた。突然の行為に驚きはしたが、それでも十四松は一松が欲しいのだ。

「いい子じゃ。ほんなら、もう挿れてもええじゃろ」

二人の間で結合音が響いた。

久しぶりのセックスだというのに、ぴったりと一松に馴染む十四松の粘膜がたまらなく気持ちいい。かつての約束どおり、十四松が一松にしかココを許していない証明のようだ。ゴム越しとはいえ、あたたかくて柔らかく、そのくせ絶妙なキツさで一松を締め付けてくる。

動きを止めればもどかしげにヒク、ヒク、と収縮を繰り返し、容赦なくピストンすれば歓喜に震えて悦ぶ。一松が十四松の中を突くたび、面白いほど連動して十四松のペニスも揺れた。

せっかくだから長く楽しみたいという気持ちは、どうせ一度では終わらないだろうという予測に負け、やがて一松と十四松は射精を果たした。

\*

使用済みのゴムを縛り、ティッシュにくるんでゴミ箱へと投げ捨てる時、一松は箱から取り出した新しい袋を噛みちぎって再び自身をゴムで包んだ。

ソファから移動して使っていない事務机に十四松を這わせるようにして、背後から抱きしめると、今度はゆっくり、確かめるように貫いていく。

「あつ、あ、ア！」

ガクガクと十四松の力が抜けて膝が震えているのに気づいて、身体を支えてやる。反らした背筋を流れる汗を舐めとり、

シャツの生地越しにもわかるほど勃っている両胸の乳首を摘み上げた。

「ひっ、んっ、やあっ」

「こら、どの口が言うとるんじや」

触った途端にキュウキュウと締めてくるわかりやすい身体にくせに、と半ば呆れながら言ってる。さっきは触ってやれなかったが、十四松のココは一松が育てた大事な性感帯だ。

「気持ちええんじやろ」

「ん、……うん、気持ち、い」

「やれやれ、ほんまに素直なやつじやの」

「可愛くて仕方がない。」

十四松は今ではそれなりに筋肉のついた肉体派で、髪も短く、どう見たって女と見間違えることはない外見だが、ツンと尖った乳首を摘まれば身をよじり、尻の穴だけで一松を悦ばせながら達することが出来る身体になっている。

十四松を慕う舎弟や、カタギのモンが想像もしないであろういやらしい姿を、一松だけが知っているのだ。

「気持ち良うしちやるけえ、もっとなん上げえ」

「……ん、はあっ！」

十四松が腰を反らし、尻を突き出した途端、一松のモノがずぶずぶ、とさらに奥へ侵入する。

「か、はっ、！ ああっ、あっ」

バックだから、さっきのセックスでは到達していなかった奥までできている、と十四松が認識すると、一松は何度もそこを突きながら乳首をギュッと摘んだ。

「ひっ！ ああ、んっ、あっ、にいさ、あん」

ズボ、ズボッ、と激しい抜き差しをされる度に十四松は声をあげてしまう。

「可愛えの。胸もコリコリしとるし、ハメられとるケツの具合もさらに良うなったで」

わざと耳元で囁いて、一松は十四松の感度を高める。自分では特に意識はしていないが、どうやら十四松は一松の声が好きらしい。吐息のかかる距離で聞くと、腰が抜けそうになると言われたことがある。

「十四松。じゅうしまつ」

熱っぽく名前を呼びながら、何度も腰を押しつける。グチュ、グチュ、と中を掻き混ぜるようにして角度を変えては十四松の身体を突き上げた。

「あ、あん、いち、まつ、にーさあん」

だいすき。

きもちいい。

もっとお。

十四松の素直な訴えに、一松も煽られる。

尻の肉を掴んで大きく左右に開き、根元まで銜えている結合部をしっかりと視界に納めながら、ピストンを繰り返した。

おれももう我慢できん、と一松が白濁をぶちまけると、十四松も続いて後ろで達した。

\*

「ん、んむ、っ、……ん」

ぴちゃ、ぴちゃ、と舌を絡め合い、唾液を交換しながら、片足を担ぎ上げられたことで晒されている十四松の奥でも二人は繋がっていた。十四松の腕は一松の背に回っており、ほぼ身体の全部が密着している。

「あ、はっ、あんっ……」

ズッ、ズチュッ、と奥まで挿入された肉棒に浅く出入りを繰り返され、快感が蓄積していく。三回目の行為ともなると、長時間広げられている粘膜は麻痺してくるが、それでも一松の形となっている直腸は律儀にそれを刺激していた。

単調なピストンに慣れてもどかしく思えば、一松は気まぐれのように十四松の乳首を摘んで引っ張ったり、カリカリと爪の先で引っ掻いたりする。

「あ、うっ、またそこお、だめっえ、……」

「おまえはココと同時にされるんが、ほんまに弱いのお」

意識が分散するのか、全くの無意識なのかはわからないが、一瞬の緊張が伝わるように締め付けが良くなる。だからつい一松も念入りに構ってしまい、それがまた十四松の感度を引き上げるといふ好循環を生んでいる。

「あん、うっ、ふっ、ううっ」

ズブ、ズブ、と尻を出入りする一松の動きはさほど変わらないが、胸の片方を舐めては優しく舌の上で転がされ、片方を酷く乱暴に押しつぶされると、異なる刺激に十四松の脳が混乱する。

「やだ、それ、おかしくなるよおっ」

「ん。ええがいに気持ちよくなつとるの」

十四松が過ぎた快感を恐れて拒否しても、身体のほうはいつも聞き分けが良い。一松の愛撫の邪魔をすることなくされるがままになって、ちゃんと与えられた分の反応を返してくれる。

今度は反対、と指と唇を入れ替え、ぶくりと膨らんでいる乳首はよりいっそういやらしく育てられていく。尻の締めまりはどんどん良くなり、一松は夢中で腰を振った。

パンパンパンパン、と結合音は止まることなく十四松の身体を揺すぶり続ける。

「あっ、ああ、んっ、いちま、っ、にいさ、」

挿入されている時点で逃げられるはずもないが、それでも十四松が一松の名を呼び、ぎゅうう、と抱きついてくることに心が満たされていく。

外側から見れば、兄の性欲処理に使われているようでもあるし、実際それを目的に十四松はおそ松の言いつけで定期的に一松の元へ届けられている。が、本人はまるでそれを否定するように自分の意志で準備を整えてくる。

「大好き……！」

その言葉を聞いた瞬間、一松の熱ははじけた。

(ああ、おれも)

十四松は他の組ともよく問題を起すし、心配もかける。しかし一松にとっては、それを補ってあまりあるほど、可愛くていとおしい存在なのだ。

つまりそれは、……愛している。

深夜、事務所の電話が鳴る。  
 気だるい身体を起こし、一松がぼりぼりと頭を掻きながら電話に出ると、相手はチョロ松だった。

同じ秘書という役職だが、第一秘書にあたるチョロ松は主に組長のスケジュール管理と、外回りを担当している。対して一松は松能組全体の雑務と、内向きの仕事が多く、連携しつつも業務の役割分担をしていた。

チョロ松が、元々アイドルのマネージャー職に興味があったことや、一松が極力他人と関わりたくない性格だったことで、今のところこの形でうまくやっている。

「もしもし、一松？ 仕事のほうはどうね？」

「あー、うん。まだ終わっちゃらん……」

叱責があるかと身構えたが、チョロ松は特に気にした風でもなく会話を続けた。

「ほうか。僕の方はさつき組長を自宅まで送ったところなんじゃけど、もう遅いしおまえも無理せず帰らんさい」

「え？ 資料、まだまとめやらんけど」

会合は目前に迫っているのに、と暗に伝えれば、それは正しく伝わったようだった。

「ちよつとしたトラブルがあつての。どうやら会合は延期に

なりそうじゃけ」

「は？ マジで？」

喜んでいいのかわからない理由が出たため、とっさにそう反応したが、会合が延期されるということは、一松の仕事も完了するのが先延ばしになるということだ。つまり、事情によつてはこのヤマが終わつたら、という褒美の話もなくなつてしまうかもしれない。

トラブルがなんなのかも気になるが、それについてはチョロ松の方から続きがあった。

「また明日にでもちゃんと話すけえ。そこに十四松もおるんじゃろ？ 伝えといて」

「ああ、わかつた」

半ば諦めながらそう言つて、一松が電話を切ろうとした時だった。

「チョロ松兄さん！ 一松兄さんのご褒美は？ どうなっちゃうん？」

「うるさつ！ なんね、十四松？ ご褒美って？」

十四松が電話を奪い取り、それだけ言つて一松に受話器を戻したため、仕方なく一松はチョロ松に事の次第を説明することになった。

「おそ松兄さんがお前に？ いや、僕は知らんよ。カラ松に聞いてみたら？ そういやあ、そがあなこと言つちよつた気がする」

気乗りしない返事だったが、そこで通話を終えた。そして、  
 「カラ松兄さんだつて！ 一松兄さん！」

と、無邪気に促す十四松に負けて、一松はトド松に電話した。

「なんでえっ？」

「トド松も知っちゃうかもしれんし」

「？？？」

一松にとつてカラ松は、別に嫌っているわけではないのだが、なるべくならあまり関わりたくない相手だ。会話の成立するトド松を選んだのは、一松としては当然の選択だった。

「こんな時間に何々？ 一松兄さん。え、ご褒美？ あー、なんかカラ松兄さんが言いよつたね。二人が喜ぶものじゃ、つて」

「ふたり？」

「なんかもつたいぶつとつたけえ面倒くさくて、ボクが途中で話変えちゃつたんじゃけど、おそ松兄さんとコソコソやりよつたのは見たよ」

「ほうか、ありがと」

結局わからずじまいか、と諦めて一松はカラ松に連絡をとりうとしたが、

「明日渡すつて言いよつたけえ、今日はもうええんじやない？ ご褒美は逃げんよ、一松兄さん」

その言葉に、一松は目から鱗が落ちた気分でした。

ご褒美は、逃げない。

そうだ、すぐ隣にある十四松の顔を見て、実感できる。

こいつは、おれの。

他の誰にも絶対に渡さないし、奪われもしない。

翌日。

お嬢がアイドルになるため上京すると言いだし、弱居組が大騒ぎになつているという話と、それが一段落するまで会合は延期になりそうだとチョロ松から発表があった。

それを聞いた一同の反応は、苦笑混じりの納得でしかなく、諦めやしばしの傍観などの身の振り方をとるしかないという結論に至つた。

そして、カラ松からは一松と十四松の二人に、上得意の客から手に入れたという、地元球団のプレミアム席観戦チケットを二枚手渡された。仕事の褒美というより、自分が留守の間に世話をかけたという意味でのプレゼントで、以前から用意していたものらしい。

それはもちろん、うれしい。嬉しくないわけがない。だが、いかにせん一松の複雑な心境は変わらなかつた。一時は十四松に関する全てが手に入ると思っただけに、過度な

期待をしてしまったから落胆が大きい。これは、おそ松から約束されたご褒美とは無関係のものだったのだ。

とはいえ、一松とて十四松という餌に食いつき、今回の仕事を完遂していないし、お嬢が絶対というルールは身に染み込んでいる。おそ松が意味ありげに笑っていたことは悔しいが、昨日の夜のお楽しみと、この先のお楽しみを思えば許すしかない。

「まあ、仕方ないのお」

一松が呟くと、十四松は不思議そうな顔をしつつ、笑顔を向ける。

「一松兄さん、野球楽しみじゃね！」

なかなか手に入らない、プレミアムチケット。カラ松兄さん大盤振る舞いじゃあ、と喜び、お礼を言っている。その姿はとても微笑ましく、一松が兄と取引していることなど、知るはずもない。

そう。本人は知らないし、気づいていないのだ。自分が獣を飼い慣らすための餌として密かに利用されていることなど、それゆえに無邪気で、逃げることを知らない。

「ああ、楽しみじゃ」

球場近くのホテルをすぐに手配し、試合が終わったら、今度はベッドの上で優しくたつぶり可愛がつてやろう。

勝った時は喜びを分かち合い、万が一負けた時は、慰めてやりながら。

そしてまた、言ってもらうのだ。

自分は一松のモノだと。

松能組の四男、組長第二秘書、松能一松の仕事へのモチベーションは、なんだかんだで、いつもこうして保たれている。